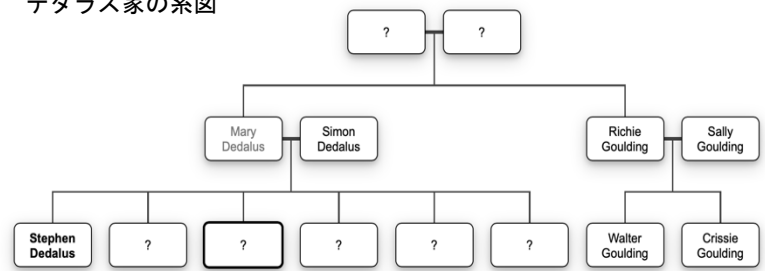


ドーキーの学校を出たスティーヴンは、ダブリン市内南東にある遠浅の海岸、サンディマウントにやって来た(汽車に乗ったと推定される)。午前11時。本挿話は海沿いを歩きながら想いを巡らせる彼の意識の流れが中心を占める。冒頭に語られる「可視態の不可避

デダラス家の系図



の様式」と「可聴態の不可避の様式」(U-Y 3.73)は、物質性を伴う〈世界〉を暗示し、スティーヴンはその外界を主体的に〈知覚〉することで、彼の思考・想念・記憶・連想がまさしくプロテウスの如く様々に変化してゆく。同時に、外界はスティーヴンに様々な刺激を与える、つまりスティーヴンは世界から刺激を受ける、という受動性も書き込まれている。「目を閉じて見るのだ(Shut your eyes and see)」(U-Y 3.73)という一種の思考実験の背後にあるのは、独我論・主観的観念論と批判されたバークリーの非物質論である(端的に言えば、客観的実在の否定)¹。見る(see)≡知覚する(perceive)≡理解する(understand)と敢えて等式で結ぶならば、読者はスティーヴンが外界をいかに受け取り、解釈しているかを追体験しつつ、心地よく良く晴れた6月の海岸に想いを巡らせる。

その意味では、スティーヴンが海岸で出遭う3つの一対(couple)——二人の老婆(「^{フラウエンツインマー}女人連」(U-Y 3.74))、二匹の犬(「犬の骸」と「生きている犬」(U-Y 3.85))、「鳥貝掬い」の「女と男」(U-Y 3.87)——が本当に実在したかどうかは、最終的には確かめられない。これらは一種のトリガーとして、若き詩人の想念・想像力を刺激する。老婆の持つ鞆が「産婆鞆」に見えたことから、彼自身の出産・誕生、それに伴う「無からの創造」や「神の意志」などの神学論が展開され、二匹の犬はスティーヴンの犬恐怖と溺死という主題を前景化する。また、一組の男女とその飼い犬は、第一挿話から何度も反復されている主従関係を示唆する。

また本挿話では、スティーヴンの母方の家(リッチー叔父とセアラ叔母)や、パリ留学時代のケヴィン・イーガン親子とのやり取りが回想され、最後に彼は前挿話で受け取ったディージー校長の手紙から「貴重なる紙面を拝借し」、そこに「詩」を書きつけ(U-Y 3.90)、「ひからびた鼻くそを岩の出っばりにのせる」(U-Y 3.94)という〈創造〉(!)を行う。「後ろ。誰かいるかも」(U-Y 3.95)というスティーヴンの直感は、一義的には世界を俯瞰する神の存在であるが、第4挿話から『ユリシーズ』の世界に入り込んだ私たちにとっては明らかのように、若者を背後から常に距離を取って見守るあの男である。

¹ ジョージ・バークリー (George Berkeley; 1685~1753) : アイルランドのキルケニー出身の哲学者。主観的観念論の代表者として知られ、「存在するとは知覚されることである」(*Esse est percipi*) と主張した。敬虔なキリスト信仰に基づきながら、ジョン・ロックの経験論を批判的に継承し、観念論の方向へ転回させた。ジョイスは少なくともその著書『視覚新論』、『人知原理論』、『アルシフロン』を読んでいた。